

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

## 宿業因縁を突破する眼

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第64回～65回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第64回では「第四十六願と第四十七願」について、第65回では「第四十七願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第62回から一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

## ■ 人生のミゼラブル

私は思うのですけれど、宿業因縁というものは、それ自身が消えることはない。ある意味、変えられないわけです。われわれが生きてきた軌跡、生きてきた結果は自分に乗っているのです。雪の上をスキーですべてシュプールがついたごとくに、自分の人生を生きてきた背景が自分に乗っている。それは絶対に逃げられない。でも、この人生でないほうがよかったという怨念と言いますか、ルサンチマン、自分自身に怨みを抱いているという、これは深層意識です。自分が意識しているときに、そう思っていない、起きているときは、私はこれで満足ですなどと偉そうなことを言っても、夢では違う。もっとよい状態に生まれ直したいという夢を見たりしているのです。それは怨念だと。こんな自分でないほうがよかったという、どこかにそういうものを人間は抱えている。そういうことは掘り下げていけば必ずあるわけでしょう。いわゆる幸せ、幸福と言うけれど、幸福とい

う言葉は相対的に良い状況を言うのです。幸せになってほしいということは、なるべく苦悩の少ない、楽な生活をしてほしいというような願いでしょう。でも、それが人間にとって本当に満たされた命かという、これはわからない。問題は、人生、時間が無駄に過ぎてしまいますか、本当に尊い時間を、罪から逃げようとして、無駄に過ごしてしまうということにあるのではないかと、私はこのごろ思うのです。空しく過ぎるという問題は、貧乏だとか病気になったとか以上に悲惨なことなのだ。いろいろやったけれど全部無駄だった、生きたことが無駄だったというような人生が一番悲惨なのだ。私どもの人生というのは、何か一生懸命生きていようだけでも、罪を作って、何か闇を深めて、何を生きたのだらうというような面が残ってくる。そうするとそれは悲惨です。皆、どこかで人生のミゼラブルを抱えているわけです。

生きていて、そのミゼラブルがなくなることが、本当にどうしたら成り立つのか。そういうときに、親鸞聖人は『浄土論』の「不<sup>ふ</sup>虚<sup>こ</sup>作<sup>き</sup>住<sup>じゅう</sup>持<sup>じ</sup>功<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>、空しく過ぎることはないという功德が浄土の功德だと。それは阿弥陀が命を住持して、支えてくださっているのだから、それに触れればもう空しく過ぎない。それを「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」（『真宗聖典』490頁、東本願寺出版部）と、親鸞聖人は和讃される。浄土の功德に死んでから遇うと言っていないのです。本願力に遇えば、もう空しく過ぎないのだということは、それでミゼラブル

が解消するという意味があるわけです。安田理深先生は、本願力に遇うことが不虛作住持であるとは、この世に無駄なことは一つもなかったのだという人生になるのだと。こういう言い方をしておられました。われわれは、あれをやらなければよかった、これやらなければよかったと後悔がいっぱいついてくるわけです。それはみんな空しく過ぎたということです。いや、よかったのだとどうして言えるのか。

### ■ 信仰の勇氣

これは禅だとか浄土教だとかということを問わず、宗教というものは、何か有限な人間の条件が良くなるという話ではなくて、人間の有限の条件は、よくよく見れば行き詰まりをもたざるをえないようなもの、あるいは、空しく過ぎてしまうというような面を逃れることができないものである。悲しいけれども、どうしようもない。にもかかわらず、それが<sup>ひるがえ</sup>翻るチャンスなのだ。こういうところに、宗教の言葉を聞いて、それをいただく勇氣があると思うのです。

勇氣という言葉は、あまり仏教では言わないのですけれど、ティリッヒというキリスト教の思想家に、「Love, Power, and Justice」という講演があります。そのPowerというのは、Courageだと、勇氣だと言うのです。信仰による勇氣と。清沢満之先生はティリッヒとまったく関係がないのですが、やはり他力の信心というのは、智慧と慈悲をいただくことによって力をいただくのだということをおられます。清沢先生も現実**に**ぶつかって、この世をどう生きるか、処世という問題に随分苦しまれましたから。自分の力では、左へも右へも、前にも後にも、身動き一つできない。「この私をして虚心平気にこの世界に生死することを得せしむる能力の根本本体が、即ち私の信ずる如来である」(『我は此の如く如来を信ず』)と。どうやって生きていってよいかわからないときに、無限他力の信念をいただくことにおいて、虚心平気に生きていくことができると。

### ■ 平常心これ道

「平常心これ道」という禅の言葉があります。この言葉を鈴木大拙先生は好きで「平常心是道」と掛軸にするように書いておられます。曾我量深先生が、最晩年、お亡くなりになる直前に、現生正定聚という教えは「平常心是道」ということではないかとおっしゃっておられました。平常心というのは、禅では「喫茶喫飯」が仏道であるといつて、することなすことすべてが仏道だと。生きていることが仏法なのだ。こういうことを言うわけです。ということは、有限な命のほかに無限があるのではない。有限な命のところに無限大悲をいただくのだ。清沢満之でいえば、他力は「自分の稟受<sup>ひんじゆ</sup>に於てこれを見る」(『臘扇記』)と。稟受とは、「稟」も「受」も受けるということです。自分が受けている、つまり宿業因縁をいただいているところに、無限他力があるのだ。こういううなずきです。

この世で人間が宿業因縁の違いを突破するような眼をもつことは非常に難しい。常にそれに縛られてしまう。でも、南無阿弥陀仏を称えるところに、本願を聞け、無限大悲の声を聞けと。この声を聞くときに、またおまえは闇を歩いているな、と気づかされる。人生の根本的な眼の違いを知らされるわけです。

(文責：親鸞仏教センター)

### 公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開(無料)で開催しています。

記

日 時：2013年12月 3日(火)午後6時30分～9時  
2014年 1月16日(木)午後6時30分～9時  
2月 6日(木)午後6時30分～9時

場 所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック  
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000  
ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。  
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211  
<https://books.higashihonganji.or.jp>